

財団法人東方研究会／東方学院

# 東方だより

第十七号

【本部(東京本校)】  
 〒101-0021  
 東京都千代田区外神田2-17-2  
 延寿お茶の水ビル 4階  
 TEL 03-3251-4081  
 FAX 03-3251-4082  
 【東方学院関西地区教室】  
 〒533-0033  
 大阪府大阪市東淀川区東中島  
 5-27-44 崇禅寺  
 TEL 06-6322-9309  
 FAX 06-6321-7695  
 URL <http://www.toho.or.jp>

第十七号 目次  
 理事長ご挨拶／「脚下照顧」  
 第二十回中村元東方学院賞授賞式  
 第二回神儒仏合同シンポジウム等  
 東方学院講師紹介  
 研究会員の声  
 研究員紹介  
 東方二十六号刊行／「閑話本題」  
 財団法人東方研究会からのお知らせ

1 頁  
2 頁  
3 頁  
4 頁  
5 頁  
6 頁  
7 頁  
8 頁

## 理事長ご挨拶

### 前田 專學



世界は、リーマンショック以来大きく変わり始めました。長い間世界経済の中心となっていた欧米日の先進国が、アジアを中心とする新興国にその地位を取って代わられようとしています。英国銀行スタンダード・チャータードのレポートは、経済規模で二〇二〇年に、中国がアメリカを抜き、インドは日本を抜いて三位に、ブラジルがドイツを抜き、日本に次いで五位に、ドイツは六位に転落すると予測しています。中国が国際社会のリーダーシップをとるようになる日も間近というこの歴史的現実には、欧米先進諸国が培った民主主義や人権といった価値との摩擦も予想させます。

このような新しい現実を踏まえて、ますますグローバル化し、世界中が一つの国のようになり、多民族、多言語、多文化、多宗教の人類社会が共生し、繁栄する地球丸の羅針盤となるのは、世界最大の民主主義国家であり、二〇四〇年には中国を抜いて世界で最も人口の多い(1,485,720,000)国になると予想されています。

漢字や儒教をはじめ日本に対する隣国中国の影響は深くかつ顕著であります。しかし仏教と仏教化されたヒンドゥー教によるインドの影響も大きく、深いにも拘わらず、それらが中国で漢訳され、変容されたものであったために、インドの影響であることにあまり気づかれなかったのです。

しかもインド人口の八割を占めるヒンドゥー教徒の奉ずるヒンドゥー教は、業・輪廻・解脱を中核としており、点に同じであります。すなわちヒンドゥー教と仏教とは兄弟である、というよりも、ヒンドゥー教と仏教とは親子であると言えないかと思えます。

日本とインドには一五〇〇年以上にわたる文化的精神的な強固な絆があり、両国は自由、民主主義、人権、市場経済といった普遍的価値を共有しています。財団法人東方研究会は、中村元先生によって、インドを中心とする東洋思想の研究とその普及を目的として一九七〇年に設立され、その普及を促進するために一九七三年に東方学院が開設されました。私どものささやかな努力が、日印の学術・文化の交流促進に資することができれば幸甚です。皆様方の一層のご支援とご協力をお願い致します。

## 「お客様は神様だ」

インドに「お客様は神様だ」という箴言がある。広い国だし、旅の途中で行き暮れることもあろう。そうした時に旅人を世話し、神様と同じように敬い供養せよ、という意味である。

五十年前の私の留学生時代には、友人たちの家でも、郷里から親戚などが来ると目一杯部屋を使って泊め、食事を出して世話する光景をよく見たものである。

しかし、今日では事情が変わってきている。インドで久しぶりに古い友人にあっていろいろ話をしていたら、「最近はお泊めない」という。面倒だからね、と言っていたが、自分で費用を出して宿を取って泊めさせるのだそうである。オレもそうだ、と別の何人かの仲間も言っていたから、そういう傾向になっているものらしい。

「日本でも同じだよ」と私も言った。確かにインドは豊かになっている。二年前にインドに行った時のことだが、親しい友人にお土産に何を持って行くのか、とたずねた。「何も要らない」という返事がメールで戻ってきた。今までは電卓だの携帯ラジオだのを持っていったものである。折角行くんだから何か持ってゆくと、言ったら、アメリカのボーカールグループのカーペンターズの良いDVDがないからそれを買ってきてくれ、という。

今までは貧しい国だったし、インドの友人に何も要らない、と言われたのは初めての経験だった。経済的に豊かになると、面倒な「もてなし」は避けて、金ですませられるものは金で処理してしまう。客の方もそれが判っているし、お互いだから、泊めてくれなくても言わなくなっている。

## 脚下照顧

お互いに気楽かまならないが、それだけあたたかい心の交流が薄くなっていることも事実であろう。インドではお客様はもう神様ではなく、お金か神様を追いかけてしまった。

(常務理事・奈良康明)

# 行事報告 平成二十二年下半期

## 第二十回 中村元東方学術賞授賞式

当研究会の創立者である中村元博士が顕著な功績のある研究者を顕彰することを目的として設立した中村元東方学術賞の第二十回（平成二十二年度）授賞式が、十月十一日（月）、東京都千代田区のインド大使館において執り行われた。今回の受賞者に龍谷大学教授・広島大学名誉教授の桂紹隆博士が選ばれた。受賞理由は、インド論理学（特に大乘論理学）の研究、ナーガールジュナ研究、アビダルマ研究、ならびに大乘経典の翻訳の分野で先端的な研究を進めると共に、後進の育成にも多大な功績を残したこと。一九九七年に主催者として「国際ダルマキール学会」を開催するなど、国際的な活躍が評価された。

式典では三帰依文を唱和し、前日が命日となる中村元博士に黙祷を捧げた。サンジャイ・パンダ公使が駐日インド大使H・K・シン閣下の「桂博士のインド論理学、仏教論理学は学術界で高く評価されている。今日、名誉ある中村元東方学術賞を偉大な仏教学者である桂博士に授与できることは大きな誇りである」という祝辞を代読された。また、桂博士の後輩にあたる齋藤明東京大学教授は、「桂博士は優れた研究者であると同時に、大変多くの後進を育てた。本



当の意味での研究者は偉大な教育者であるということの見本である」と祝辞を寄せた。それを受けた桂博士は、中村博士との思い出話を語り、謝辞を述べられた。式の終了後、引き続きインド大使館において、桂博士を囲みながらインド料理による盛大な祝賀会が催された。渡邊寶陽立正大学名誉教授の乾杯の後、ホテルマネージメントインタナショナル相談役・比良龍虎氏、川崎信定筑波大学名誉教授が桂博士との思い出などを語り受賞に華を添えた。

### 桂博士の謝辞



「受賞の報せに、大変驚愕すると共に、中村先生の名がかかった賞をいただけるのは夢にも思っています。二十七年間勤務した広島大学は全国でも珍しくインド哲学の講座があり、その初代教授に中村先生が就任されました。中村先生は、大家であるにもかかわらず、学会でもしばしば研究発表をされました。私は、三十代半ばの頃、ある学会で中村先生が発表された後、生意気にも手を挙げて質問し、お答えいただいた記憶があります。たぶん、失礼ということでも誰も中村先生の発表に質問する方はいなかったと思います。厚かましいことを省みずに質問したことを、中村先生のお写真を見るたびに思い出します。私は現在、大学の宗教部長をしていて、その仕事に追われる日々ですが、今後ともますます研究に精進していきたいと思っております。」

【略歴】昭和十九年生まれ。京都大学文学部卒業。同大学院修士課程修了。トロント大学博士課程修了。PhD（トロント大学）。文学博士（京都大学）。現在、龍谷大学文学部教授。

【著書】『インド人の論理学 問答法から帰納法へ』など多数。

### 第三回中村元インド哲学カフェ

七月二十五日（日）午後二時から、京都市キャンパスプラザ京都において、東方学院関西教室主催の公開講座第三回中村元インド哲学カフェ「インド文化と身体論」が開催されました。今回も前回に続き、約五十名の参加者がチャイ（インドのお茶）を片手にインドの文化に触れました。第一部では、佐久間留理子研究員による「古代インドの身体表現」、第二部では、北田信研究員による「ヨーガと音楽―身体というリチュートと妙音」と題する話題提供がなされ、会場に詰めかけた参加者から活発な質問や意見が飛び交い、大変な盛況となりました。



## 第二回神儒仏合同シンポジウム



八月七日(土)、東京都千代田区の神田神社において、宗教学者神田神社(神田明神)、財団法人斯文会(湯島聖堂)、そして財団法人東方研究会は、約百名の参加者のもと「心の社会貢献」と「神儒仏の対話による相互理解と協調」を目的とする第二回神儒仏合同シンポジウム「心の通い合う社会を求めて」いのちを生きる」を開催した。

神田神社宮司・大鳥居信史氏、続いて東方研究会常務理事の奈良康明氏が挨拶し、続いてそれぞれの講演が行われた。まずは儒教の立場から加地伸行氏(立命館大学教授)が「日本の真の宗教心―儒教の宗教性」の演題で講演した。続いて仏教の立場から有縁社会への回帰」という題のもと、

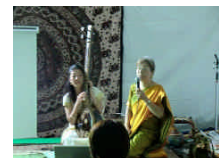
現場での体験談を交えながら「菩薩行の実践」への協力を求めた。神道の立場からは、三橋健氏(國學院大学大学院客員教授)が「なぜ『いのち』は大切なのか―神道の立場から―」として講演した。その後、コーディネーターの武田道生氏(淑徳大学准教授)の進行のもと、講演者による講演の補足と意見交換、質疑応答がなされ、最後に「三教の叡智は、現代の無縁社会から我々を救い出し、どう生きていくべきかを教えてくれる」と締めくくられた。



## 「ナマステ・インディア二〇一〇」に参加

九月二十五日(土)二十六日(日)、東方研究会は、東京都渋谷区の代々木公園内で開催された「第十八回ナマステ・インディア二〇一〇」に協賛参加した。このイベントは日本とインドの相互理解を深める文化交流イベントであり、東方研究会は今回で四回目の出展となる。今回は会場メインゲート傍の特設テントにおいて、当研究会が企画・運営にあたる、公式の「セミナー・ハウス」を担当し、学術や芸術的な視点から日印の文化を知ってもらうことを目的として、様々なワークショップを二日間に行っていた。

初日は、ヴィーナー奏者で東方学院講師の場裕子氏が南インド音楽を演奏し、来場者にインド楽器の手ほどきをした。また、吉村均研究員が「心を変える仏教―インド・ナランダー仏教大学の伝統と現代」、さらに森和也研究員が「天竺と出会った日本人」と題する講演を行った。二日目は、東方学院講師である山口泰司氏による「南インドの宗教都市オーロビル」、保坂俊司氏による「髭とターバンの宗教―シク教の教え」、さらには、田中公明研究員による「MANDALA」、奈良修一研究員による「キップリングの見た西と東―イギリスとインドを通して」と題するこのイベントでしか聞けない興味深い題目による講演が行われた。特に今年は、大きなテント内で仏像彫刻教室の研究員会の作品展示と実演、研究会員有志によるジャガイモ仏作成指導が行われ、沢山の来場者参加があり、大好評に終わった。



## 第十一回東方学院・酬仏恩講合同講演会

十一月二十七日(土)午後、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺慈恩殿において、同寺のご後援の下、東方学院と酬仏恩講共催で第十一回目となる合同講演会が開催された。講演会は前田学院長の挨拶に始まり、細野邦子研究員(東方研究会アジア諸国派遣留学生)による「東洋の論理と西洋の論理―比較論理学序説―」と題する講演と、東方学院講師である勝本華蓮氏による「縁(えにし)と縁起の法」と題する講演が行われ、最後は薬師寺の松久保秀胤長老より閉会の辞をいただいた。



## 東方学院 講師紹介

### 原典講読の貴重な場

#### 有賀弘紀

(東方研究会研究員・東京外国語大学講師)



二年近く研究生生活を中断していたが、現理事長の前田専學先生の計らいで平成八年度より東方研究会で研究を再開できたことは何より嬉しいことであった。創立者中村元博士の最晩年であり、資料配りなどのお手伝いという名目で東方学院での講義を拝聴する機会にも恵まれた。学ぶ意欲の旺盛な研究会員を前に、何と『撰大乗論』と『大唐西域記』の講読であった。初めの人から何十年も受講している人までいたであろうが、難しいテキストを少しづつ読み解く講義の光景は忘れられない。さまざまな関心からの質問に丁寧に耳を傾け解説する姿に、いろいろなことを学ばせて頂いた。

現在、「インド哲学原典講読」と「サンスクリット語中級(一)」でそれぞれ『ヨーガ・バーシャ』と『ラグ・ヴァンシャ』を講読している。原典講読は『サーンキヤ・カーリカー』ガウダパーダ注に引き続き三年目である。サーンキヤ・ヨーガ思想のテキストを忠実に理解することを目指しているが、時として現代的視点では理解し難い論理や前提に出くわす。テキストの検証や思想交渉史を踏まえた検討が必要となる。そうなるに講読のペースが遅くはなるが、問題点を浮き彫りにすること自体にも大きな意味がある。熱心な研究会員の幅広い好奇心や経験からの発言に刺激されながら、皆で根気よく取り組んでいる。

また、『ラグ・ヴァンシャ』の講読は、詩特有の技法や文章のつながりをマツリナータの注釈から理解する方法の習得に留意して、ゆっくりと読み進めている。たくさん読むスタイルはとらず、言語としてのサンスクリット語の特徴への理解が深まればと、並行してインド文学のテキスト講読も行ってきている。

考えてみると、東方学院のように原典を多くの人と読む機会を提供してくれるところは他にはないだろう。サンスクリット語の世界をじっくりと味わうことのできる貴重な時間である。

## 出家者とは

### 荻谷定彦

(種智院大学名誉教授)

四十年ほど前、スリランカ(セイロン)各地の僧院に四、五日ずつ居候しながら二か月ほど滞在した時、農村の僧院では、僧(比丘)は毎朝十時頃に裸足で托鉢に出かける。無言で農家の門先に立つと、家から女性(主婦)が裸足で出てきて、なにがしかの食べ物(御飯とおかず)を比丘の鉢に入れ、合掌して土下座し、頭を比丘の足に付けて礼拝する。その間、比丘は何の言葉も発さず、頭を下げるもしない。むしろ、礼を言い頭を下げることは乞食のすること、律に抵触するのだ。そして静かに次の家に向かう。

ここに、仏教という宗教の原点を見た気がした。仏教は、インドにあって出家者の、出家者にとって不可避な生老・病・死を苦そのものと捉え、それを超克(解脱)するために、世俗社会の一切(妻子や親の扶養、労働などの生産活動、その他)を捨て、ただひたすら修行(苦行と瞑想)に励むのであるが、一体、出家者ほどのようにして食べ物を得ていたのか(人間、食べなければ必ず死ぬ)。野山に生える草やその根、あるいは木の実を採って食べていたのか、はたまた乞食として「くれ」と手を差し出していたのか。それらはいずれも出家(世俗の一切の放棄)に反する行為である。二千五百年も前からインドの人々は貧富を問わず、このような出家者を、彼がどのような修行をし、いかなる宗教を奉じているか全く知らず、それで出家者は生きてゆけた(断食を除けば、(布施)してきたのであって、それで出家者は生きてゆけた(断食を除けば、餓死した出家者はひとりもない)。

どうして、インドの人々はただ髪を剃り黄褐色の衣を付けた(これは乞食との違いを示す出家者のスタイル)、素性の知れない出家者に布施したのか。人々は、聖性を持った神々や聖人、その予備軍としての出家者などを礼拝・供養するといふ宗教行為によつてのみ、今生の幸福と後に天に生まれるというご利益(果報)をもたらし善因(善根・功德)が我が身に生じるといふ、インド固有の民族宗教、即ちヒンドゥー教に生きているからである。この根底には、業による輪廻転生というインド民族固有の宗教観念が存するのであって、この強固な岩盤に支えられて、大海の如き一般社会の宗教(ヒンドゥー教)が在り、そこに浮かぶ小さな舟のように出家の宗教が、そしてその一つである仏教も存在しえたのである。



どうして、インドの人々はただ髪を剃り黄褐色の衣を付けた(これは乞食との違いを示す出家者のスタイル)、素性の知れない出家者に布施したのか。人々は、聖性を持った神々や聖人、その予備軍としての出家者などを礼拝・供養するといふ宗教行為によつてのみ、今生の幸福と後に天に生まれるというご利益(果報)をもたらし善因(善根・功德)が我が身に生じるといふ、インド固有の民族宗教、即ちヒンドゥー教に生きているからである。この根底には、業による輪廻転生というインド民族固有の宗教観念が存するのであって、この強固な岩盤に支えられて、大海の如き一般社会の宗教(ヒンドゥー教)が在り、そこに浮かぶ小さな舟のように出家の宗教が、そしてその一つである仏教も存在しえたのである。

## 研究会員の声

### 三年目のささやかな決意

#### 前田 國隆



私が神田明神ちかくの東方学院に通うようになって二年になります。そしてことしは還暦をむかえる年齢になります。

そもそも東方学院に行こうと思うようになってきたきっかけは、東洋思想に関心があったからですが、ふり返ってみると、サラリーマン生活も三十数年つづけ、そろそろ定年の節目が見えはじめたころに、このまま私の人生は終わってしまうのだろうか。たしかに学校も出て、家庭を築き、妻もあり、子もあり、それなりの社会的地位もできた。しかし、これでいいのだろうか。鏡の前にたつと、「宿昔青雲志、磋砣白髮年」（宿昔の青雲の志は、磋砣たり、白髮の年）で、何故に、人として生まれてきたのか、如何に生きるのか、がわからない。

しばらくの間、思想哲学、宗教関係の書物に解決を求めました。そして最終的には、東洋に生まれ、日本人となつて、しかも仏教を知らぬのでは、自分の名を知らぬようなものだと考えて、東方学院の門をくぐることにしました。

仏教について学びたいとは思いましたが、何からはじめればよいのか全く見当もつかず、盲人象を撫ぜる思いで、とりあえず自分にとつて少し親しみをおぼえる講義をとることにして、まずは週に三回、平安仏教と『教行信証』、『法華経』についての授業をうけました。

教室では、老若男女、学びたい者のみがつどい、いままでの学校生活のような良い成績をあげ、他と競争する世界ではなく、真剣に自分のための学問を深める人々のあつまりで、わからないことは、たとえ初歩的なことでも、気軽に質問ができ、また、講師もこれに丁寧にあたえてくれて、さながら釈迦と十大弟子の問答もさもありなんと思われる雰囲気です。

さくあ、これからも、仏道のおしえに従い、ひかり輝く明るい生命を求めて、仏の智慧をまなび、そして少しでも仏教の真髄をきわめることができるように、学びつづけていこう。そして、自分の人生を納得のいくものとして進んでいこう。あらたな学期をむかえるにあたり思った次第です。

## 理想的なつながりが生まれる

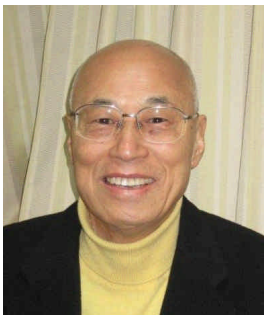
#### 森田俊和

二十数年前、荒廃した中学校を建て直そうと、生徒に「再建運動」というものを展開させたことで、前田専學先生とのご縁をいただきました。けれど、六年程前までは、公立中学校では特定の宗教教育は御法度であるし、宗教には胡散臭い面があると、宗教とは程遠い教師生活を送ってきたつもりでした。そして六年前、生徒自らが理想的な日本一良い中学校を創ろうと思いい立ち、言葉では表現できない自分なりの究極的な至高の境地に達して、その実現を目指す「日本一運動」が始まりました。この運動は私の手に負えず、前田先生とのご縁にお縋りしようと、平成十九年三月、東方学院の講演会に出席させていただきました。この時、奈良康明先生のご講演を拝聴いたしました。お二人の先生のご指導を賜りながらその運動を進める過程で、教職員・生徒は、いかなる時も、仏教（宗教）に支えられているし、そうでなければ「理想的な良い中学校」は創れないと確信するようになりました。

しかし、現職中は忙しきにかまけて、ほとんど勉強せず、仏教に関する知識は皆無であり、仏像彫刻など思いもよりませんでした。ですから、中学校教師定年退職後、前田先生の「仏教入門」、川崎信定先生の「比較思想」、西山多寿子・小田谷史弥先生の「仏像彫刻の実技基礎」を学び始めた頃は、みなさんについていけないのではないかと不安でした。

「仏教入門」初めての講義の日、待合室で、昨年講義を受けた方から、「先生が穏やかに導いて下さるから心配無用」と優しく声をかけていただきました。日を経るにつれ、少しずつ受講者二十一名の方々とつながりも深まり、今では楽しい時間を過ごさせていただいております。「比較思想」では、数年ないし十年以上にわたり比較思想を学んでおられる方々、道元を研究されておられる方々、その方々の知見は広く、私の無知さを再認識させられますが、お互いに自分の研究成果を発表し合って、先生からより深い視点でのご指導を賜りました。

四名という少ない人数ですが、率直に語り合え、深くつながる大切な場となりました。「仏像彫刻の実技基礎」では、お二人の先生の懇切丁寧なご指導の下、プロから初心者まで総勢三十名の方々と、和気藹々と和やかな雰囲気の中で時と仏を刻んでいます。退職し仕事を通しての人間関係が消え、他にこれといった交流がない私にとって、どの講座も、人との理想的なつながりが生まれるありがたい場となっています。



## 研究員紹介

### 中村元先生、そして東方研究会

#### 茨田 通俊



私が研究員に採用されたのは一九九三年のことでした。早いものでそれから十八年の月日が流れたことになりました。今では中村元先生を直接知らない若い研究員も増え、時の移ろいを感じずにはおれません。

中村元先生は生前、毎夏四天王寺の夏季大学への出講に合わせて、私が住む関西にお見えになりました。私たちはその機会に先生のお話を拝聴し、ささやかな歓迎の会を開いておりました。先生の最晩年には私が送迎を務めることになり、緊張感の中にも先生を独占するという幸せな時間を過ごすことができました。先生は若輩の私に大変気を遣われ、様々な話題を提供して話しかけて下さいました。私はその中で、先生の学問に対する飽くなき情熱と、学場の確保へ向けた創造的精神を垣間見て、改めて恐れ入ったのでした。

関西では、山口恵照先生が長らく代表をお務めになり、昨年に亡くなられるまで大変親しくご指導いただきました。おかげさまで九七年には、アジア諸国派遣研究者として、インドのプネーに学ぶ機会も得ました。七十日程の短い期間でしたが、プネー大学のJ・R・ジョーシ先生の下で、日本では指導を受けることが困難な初期ジャイナ教聖典を読むことができました。学問に専念できる貴重な環境の中で、必死に勉強したことが思い出されます。

元来は初期仏典と初期ジャイナ教聖典を資料としながら、仏教興起時代の思想を研究することが中心でしたが、近年はジャーナタカ研究の第一人者である田辺和子先生らと共同で、東南アジア伝承写本の研究にも当たっています。また研究部会では、関西在住の研究員と共に、東洋思想を通して現代社会の課題を考える試みを行っています。

約四十年前、希代の大学者中村元先生が創設された東方研究会。その歴史の半分近くはわたって、末席を汚して来たことになりました。それでも先生の慈悲深い眼差しは今も私を見守り、その高き精神は深く私の支えとなって生き続けているのです。

## 学舎（まなびや）

### 柴崎 麻穂

東方研究会・東方学院に通い始めて、もうかれこれ二十数年になる。人づてに東方学院の手引きを得る機会を得て、受講を思い立ったのがきっかけだった。

中村元先生に初めてお目にかかったのは、大学二年の新緑の頃。東方学院の講義受講第一日目でもあったその日には、今でも忘れられない思い出がある。当時、新規受講者（現研究会員）には、中村先生との面接が義務づけられていた。中途入学のため、先生の講義が行われていた大手町教室（大手町ビルの一室）で、講義前に面接を受けることになった。講義控え室のドアをノックすると、曇りガラスの向こうには、やさしい微笑みをたたえた中村先生が座っておられた。偉大な先生を前に緊張しきっていた私は、即席に考えた挨拶の一言「無学なものです、どうぞよろしくお願ひします」を言うのが精一杯だった。その日、先生は講義室に入ると、黒板に「無学」の二文字を書かれ、「仏教では、無学とは、もう学ぶ必要のない境地のことを言います」という言葉で講義を始められた。会社帰りのサラリーマンやOL、年配の紳士・ご婦人に混じって着座していた私は、はずかしさのあまり、その日は顔を上げられないまま講義を拝聴した。今思えば、大人の世界への一歩を踏み出した日だった。

以後、大学に通いながら、月曜日夜は大手町教室で中村先生の講義を、火曜日は川崎信定先生のチベット語、またしばらくして土曜日の上村勝彦先生のサンスクリット語も受講する日々を過ごした。また半年ほどして、週に一度事務局でお手伝いをするという機会にも恵まれた。大学院進学後、しばらく伺えない時期もあったが、二〇〇一年から二〇〇二年の二年間と、二〇〇七年から東方研究会の研究員に加えて頂いた。

この二十数年の間、東方学院・東方研究会を通して、一線で活躍される先生方や事務局の研究員の方々、また学舎に集う人生の先輩方とのたくさんのお出合いを得、また多くのことを学び、育てて頂いた。

このコラムの執筆を通して、これまでのさまざまな出来事を振り返り、初心に立ち返って、「無学」の境地には至れなくとも、これまで受けた学恩に少しでも報いなければ、という思いを新たにしたい。



# 三枝充恵前東方学院長ご逝去



財団法人東方研究会前東方学院長・三枝充恵（さいぐさみつよし）先生は、平成二十二年十月十九日、肺炎のため逝去されました。享年八十七歳でした。初代東方学院長の中村元博士の亡き後も東方学院の命脈を維持しその理想を次代へ継承するため、中村博士夫人の洛子理事長（当時）、前田専學常務理事（当時）とで新体制づくりを進め、講座を増やしたり講師陣を整えるなど学院の充実を図った。一九九九年十月より二〇〇三年六月まで、第二代東方学院長を務めた。

【経歴】一九二三年四月一八日、静岡市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業後、ミュンヘン大学に学び、國學院大学を経て筑波大学の教授を務める。一九八七年、定年（名誉教授）で退官後、日本大学教授となる。このほか日本印度学仏教学会理事などを務めた。文学博士。

【著書】『東洋思想と西洋思想 比較思想序論』『初期仏教の思想』『比較思想論』『仏教入門』『三枝充恵著作集全八巻』など多数。中村元博士との共著に『パウツグ・佛教』がある。

## 『東方』第26号 刊行

3月31日、当研究会の機関誌『東方』の最新第26号が刊行されます（今号から題字に中村元先生の自筆を使用するなど、表紙のデザインを一新いたしました）。今号には論考5編・資料1編・報告2編のほか、第2回神儒仏合同シンポジウム講義録及び中村元博士東方学院講義録（『大唐西域記』を読む）などを掲載いたしております。

なお、本誌は会員（研究会員を除く）の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもございますので、詳細は事務局までお問い合わせください。



### 【主な執筆者】（敬称略）

- ・奈良 康明（東方研究会常務理事）
- ・加地 伸行（立命館大学教授）
- ・篠原 鋭一（NPO自殺防止ネットワーク「風」理事長）
- ・三橋 健（國學院大学大学院客員教授）
- ・定方 晟（東海大学名誉教授）
- ・山下 博司（東北大学教授）
- ・岡光 信子（東北大学専門研究員）
- ・大野 善宏・木村 紫・中山 良秋（東方学院研究会員）

### 「青い鳥」

西岡秀爾



新年早々、年が明けたという感覚があまりないまま、所用のため車で高速道路を走行していた時のことである。なにげなく聞いていたラジオから某銀行のCMが流れてきた。

この地球上に、自分という人間は、自分ひとりしか存在しない。だから、自分に素直に生きるのが一番だと私は思う。良かったと言えぬ人生。優しい気持ちになれる人生。自分らしく生きる人生。……

と心地よい男性ナレーターの声。なぜかとても元気が出た。次の週末同じ時間帯に、高速道路上で今度は女性ナレーターの声を聞いた。今度は女性の声の効果もあつてか、心が安らいだ。このCMの詞のお陰である。八方塞がりの焦燥感から解放された気がした。好きな禅語の一つとして「独坐大雄峰」という言葉がある。中国の唐の時代に活躍された百丈懷海禅師の教えである。ある僧が百丈に「この世で最も有難く尊いものは何ですか」と尋ねた。皆さんであれば何と答えるであろうか。「家族」「お金」「地位」「神」「仏」；人それぞれであろう。それでは百丈はどう答えたか。その答えが「独坐大雄峰（この山にこうしてしつかりと坐して生きていること）」。

### 研究員のコラム 第6回 閑話 本題

在するのではなく内にあつたという結果である。しかし、原作は童話として書かれたものではなく、戯曲である。その原作には続きがあり、青い鳥は家の中にいたと気づいた瞬間に遠くに飛び去ってしまった。このことは私たちに、簡単に青い鳥を手中にすることはできないと教示しているのか。それとも、青い鳥を探し求める過程こそが大切であるというのであるのか。その答えは人それぞれによって模索されるべきであるが、西洋の童話劇と東洋の禅語録との不思議な通底に気づかされるのである。

「閑話本題」では、本日の幸せとは自分が気づかないだけで、何げない身近なところに現前していると思ふ。ゆえに、日々の生活こそを大切にしようと思ふ。またすぐに青い鳥を追いかけようと思ふ。童話の中では、青い鳥（幸せ）は、家の外に存在するのではなく、戯曲である。その原作には続きがあり、青い鳥は家の中にいたと気づいた瞬間に遠くに飛び去ってしまった。このことは私たちに、簡単に青い鳥を手中にすることはできないと教示しているのか。それとも、青い鳥を探し求める過程こそが大切であるというのであるのか。その答えは人それぞれによって模索されるべきであるが、西洋の童話劇と東洋の禅語録との不思議な通底に気づかされるのである。

# 財団法人東方研究会からのお知らせ

## 会員募集

当研究会では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当研究会への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

### ◇ 普通会员 ◇ 年会費 7千円

普通会员の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究会主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

### ◇ 賛助会員・維持会員 ◇ 賛助会費 1口 1万円・維持会員 1口 5万円

当研究会では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究会の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。  
\* 詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

### 二〇一一年度

#### 東方学院新規講座のご案内

来たる四月より東方学院の新年度が始まります。今年度からは、左記の各講座が新たに開講されます。各種講座の詳細やお申込方法などは『手引き』またはホームページにてご確認ください。

#### 《東京本校》

「パリー語入門」

【月曜・初級】 八尾 史 講師

「ヒンディー語初級」

【ヒンディー語中級】

【月曜】 坂田貞二 講師

「近代」を再考する」

【木曜・初級】 奈良修一 講師

「日蓮『開目抄』を読む」

【金曜・初級】 関戸堯海 講師

「英語による仏教入門」

【土曜・初級】 Mathew Varghese 講師

#### 《関西地区教室》

「ブッタの生涯と思想」

【火曜・初級】 杉岡信行 講師

「仏教入門」

【木曜・初級】 沖本克己 講師

「陰陽の宇宙論と東アジア」

【二月二十三〜二十五日・初級】 鈴木一馨 講師

「仏教と芸術・観音の説話と造形」

【十一月／二月・初級】 佐久間留理子 講師

#### 「鶴岡文庫・東方学院共催講座」

★二〇一一年度のカリキュラムは「中村元『ブッタの生涯』を読む」と題して左記のような予定で行われます。

#### 【講座の主旨】

世界的な仏教学者で東方学院の創立者である中村元先生の著書『ブッタの生涯』をテキストに、仏教の成立する背景となったインドの社会や宗教・思想をふまえながら、ブッタの生涯とその思想を講説します。そのうえで、ブッタの生き方や思想が、昏迷する現代社会に生きる私たちにとってどのような意味を持っているのかについて考えてみたいと思います。

【日時】 第四日曜日・毎月一回（全十回）  
十三時三十分〜十五時三十分

【場所】 鶴岡文庫（鶴岡八幡宮境内）

【受講料】 年間一万円

第一回 五月二十九日

「インドにおけるブッタ像」 奈良康明 講師

第二回 六月二十六日

「古代インドの宗教と思想」 前田専學 講師

第三回 七月二十四日

「原始仏典の世界」 釈悟震 講師

第四回 八月二十八日

「ブッタの生涯」 林慶仁 講師

第五回 九月二十五日

「ブッタのこぼれ」 柴崎麻穂 講師

第六回 十月二十三日

「悪魔の誘惑」 有賀弘紀 講師

第七回 十一月二十七日

「生きる心がまよえ」 武田浩学 講師

第八回 一月二十二日

「ブッタ最後の旅」 奈良康明 講師

第九回 二月二十六日

「インドに生きる」仏教」 佐々木一憲 講師

第十回 三月二十五日

「現代社会とブッタのこぼれ」 前田専學 講師

\*なお、申し込みは鶴岡文庫(TEL)〇四六七二(二一九一四四)に直接お問い合わせください。

## 新ホームページ開設

これまでのホームページを一新いたします。様々な情報が公開されますので、是非ともご覧(3月1日以降)ください。



## 2011年度 東方学院受講の手引き 配布中 (無料)

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『2011年度東方学院受講の手引き』を配布いたしております。ご希望の場合は、事務局にお申し込みください。



東方だより 第十七号(平成二十三年三月一日) 編集/発行 財団法人東方研究会

【東京本校】TEL 〇一〇〇二二  
千代田区外神田二一七二 延寿お茶の水ビル四階  
TEL 〇三三二二一〇八